[dɔ̃:k]

DONC どんく

発行

三重日仏協会

SOCIÉTÉ FRANCO-JAPONAISE DE MIE

事務局 津市東丸之内21－4 オーデンビル

3F/ Siege : Oden Building 21-4 Higashi-Marunouchi Tsu JAPON ☎0592 (26) 3159

N° 015 le 28 Février 1991 SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

全国31の日仏協会

多彩な活動と問題点を冊子に

「若い女性会員が欲しい」の声も

昨年秋、大阪で「全国日仏協会の集い」が開かれ、全国の仲間が交流を深めましたが（既報）、このほどホストの大阪日仏協会からその内容を冊子にまとめ、配布していただきました。その中身のごく一部を、今後の参考のためにご紹介いたします。

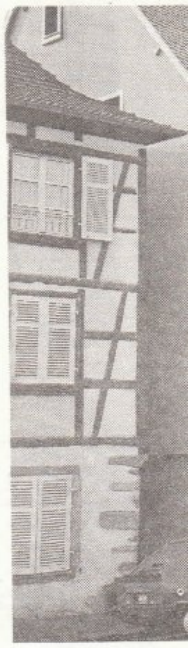
まず日仏協会という団体は、北は札幌から南は熊本まで約３０あり、成立の経過はさまざまですが、東京、大阪、京都など一部の大きい組織を除けば、だいたい似た規模で、主に共通した活動をおこなっているようです。

事業内容ではパリ祭、フランス語講座、講演会、ペタンクなど本会と同様、実施している協会が多いのですが、ほかにワインの講習会（東北、盛岡、金沢など）、ダンスパーティとバス旅行（神戸）、フランス人のホームステイの世話（香川、神戸）、シャンソンの夕べ（広島）、写真・絵画展（福岡）、フランス語観光ガイドブックの発行（金沢、三重）、１００回のフランス映画祭（長崎）、ねぶた祭りをフランスに紹介（青森）などと多彩で、講演会にしてもミッテラン大統領夫人を講師に招いたところ（福岡）などがあって驚かされます。

協会の活動の問題点、悩みとしては、「経済交流の方策を探っている」（青森）、「若い女性会員の獲得」（金沢）、「いま３８名のフランス人会員をもっと増やしたい」（神戸）、「フランス語を選択する学生が減っている。どうすればフランス語を学ぶ人を増やせるか」（福岡）、その他、活動のマンネリ化や財政難などがあげられています。

以上をご参考に、今後の本会の活動についての積極的なご意見、ご提案をお待ちしています。

会員のページ



COLMAR と RIQUEWIHR を訪ねて

楯野正雄

昨年三月、国際会議に出席するため、Paris を訪問しましたが、週末が自由になったので、かねて憧れていた Alsace に足をのばすことにしました。Franceには，ワインの産地であり、且つ大変美しいといわれる町が三つあります。

Alsace の Colmar はその一つで、ワイン好きにはたまらない聖地です。ワインに魅せられて５年になる私は、特にフランスワインが大好きで、毎日とはゆきませんが、和風中心の家庭料理にもワインを合わせ、喜びや落胆を味わっています。

Alsace のワインは辛口の白が主で、ブドウ品種により芳香は異なりますが、いずれも上品で淡々とした味の中にコクがあり、親しみやすいワインです。この Alsace では、二度にわたるドイツの占領で、ワインづくりもドイツ風にするよう押しつけられたそうですが、気骨ある人々が Alsace の作り方を死守したお蔭で、今日でも伝統ある香りと味が引き継がれているのです。

Paris から飛行機で40分、Strasbourg まで行き、遊覧船による運河の散策のあと、列車で Colmar に入りました。Petite Venise と名付けられた区域にある古風なホテルで泊まり、翌朝早速散歩に出掛けました。石畳の舗道に面して建つ家々は、黒っぽい柱や桁を表に出していますが、壁の色は家ごとに異なっており、ブルー系、赤系、緑系、グレー系、白系とまことに多彩です。また市の中央部のある税関や教会は雉子の首や羽の色にも似た配色で、一言でいえば街全体がおとぎの国そのものでした。道の両側に咲き誇る forsythia（れんぎょう）に早い春を感じつつ、タクシーで走ること約二十分、Riquewihr の村の入口に着きました。この村は Alsace のワイン街道の中で最も美しいといわれるだけあって、村を囲う城壁の中に入るやあっと驚きました。すべての家はワイン屋、グラス屋、みやげ物屋、菓子屋、ホテル、レストランのいずれかで、全部がワインに関係しているのです。家並みは Colmar と同様に、隣の壁

の色は違うものの、柱や桁、破風はほぼ似ていて、全体としてバランスしています。その地方の伝統的な形を共通に持ち合わせながら、壁の色や窓の形は自由、といった全体と個の見事な調和は、日本人が美しい町を作るために是非見習わねばならぬところです。

幸福を運んでくれるといわれる cigogne（こうのとり）の看板のあるレストランに入り、お目当てのアルザスワインを飲みました。期待通りの香りと味に満足しつつ、周りのテーブルや建物を見渡していると、アルザスワインはボルドーやブルゴーニュのように高貴なワインを産出しないだけに、村をあげて我が村のワインを応援しようという心意気があちこちに感じられて陶酔しました。

帰路、タクシーを電話で呼びましたが、自分のフランス語が通じたこともあって、来る時よりも一層 Alsace が好きになっていました。

焦眉の急、犬馬の労

どちらも中国古典のことばだが、ここのは関口俊吾画伯の随筆に出てくる話である。戦前からパリで活躍しつづけた画家で、1981年偶然お目にかかることができたが、翌82年にその本は出版された。

パリ南郊に国際大学都市とよばれる一劃があり、ここには世界各国が在仏研究者や留学生のための寮をもっているが、日本館も戦前から存在した。最近では当協会顧問の小堀先生も館長をつとめられたことがある。1930年代の末頃、本県出身の長野泰一博士はすでに世界的学者としてパスツール研究所で高名をはせており、日本館でも ぬし的存在だったようだが、そのもとに関口とか仏文学の鈴木力衛とかの錚々たる先生がたが寄宿しておられた。

この二人は勉強にも猛烈だったが巷のすべての遊びにも没頭したらしい。この遊びも二人にとっては大切な勉強そのものだったのだろう。その上、土曜の夜は競犬、日曜日には競馬に賭ける。勝っては祝杯、負ければヤケ酒で、という話の原著末尾の数行。

――ある日、鈴木は犬でえらく負けて、翌る日の競馬でも負けて、すっからかんになって、それでやけ酒飲んで、ライターをつけたところ炎がぼっと燃え上って、眉毛を焼いてしまった。「焦眉の急、犬馬の労」と鈴木が酔払いながら言った。僕が「これは傑作だ!」と言ってほめた。鈴木はウイットにとんだ人だったよ。

（OURS）

初冬の日曜日、好天に恵まれた三重日仏協会「親睦ペタンク大会」には二十数名が参加、和やかに妙技?を競った。結果、抜群の練習量を誇る鈴木善太郎二世が圧倒的な強さでチーム優勝に貢献、カップを手中に。（津市・お城西公園）

年末の土曜日、四日市の協会メンバーが中心となって、「フランス音楽・真昼のサロンコンサート」を開催。約六十人の聴衆はフォーレやドビュッシーの名曲に感動した。写真はレセプションで挨拶する伊藤隆之氏（ピアノ）と、V・シュバリエさん（ソプラノ）。（四日市プラザホテル）

恒例のフランス語入門講座、今年は前半を三重大・渡辺先生に、後半をダメム先生にご担当いただいて、十二回シリーズで開講中。二月一三日、第一回目は両先生がそろって指導され、二十数人の生徒は熱心に勉強していた。（津・オーデンビル）

新名簿作成についてお願い

９１年度に向けて会員名簿の整理をおこないます。

1. 前の名簿のときから、姓名、住所、職業、電話番号等の変更があった方 および
2. ご都合で退会を希望される方 は、ハガキまたは電話で事務局までお知らせください。郵送先は本紙表紙記載のオーデンビル、電話0592-26-2766井土または、0592-26-8540武田まで。